

欲望としての<美>を考える

I

<美>と<美しい>—この二つの語は、名詞と形容詞として分類されますが、意識の働きとしては、この二語のあいだには、千里の径庭があります。

使われた順序（人間が原始、声にした過程）を考えれば、<美しい！>がずっと早い。

なにか、これまで見たこともないモノに出会って胸搏たれ心奪われたとき、「ああなんてうつくしい！」と思わず声にした人類最初の人がいればはずです。もちろん、記録には遺っていません、しかし、誰か初めて、「うつくしい！」と聞こえる発声をした人がいた。その段階では「ウツクシイ」と声を発したその音は、<美しい>を指示していなかった。しかし、その人がそう声にするのを聞いて、それに応じて「うん、うつくしいね」と似たような同じ音を別の誰かが声にして発した。「うん、うつくしい」と、もう一人の人が言った。別のもう一人も「うん、うつくしいね」と応じる。そうして、<美しい>ものに出会ったとき、「うつくしい」と言い合う習慣が一つの形となって定着して行き、言葉が生まれるのです。

しかし、<うつくしいね>と語り合っているだけの場面のなかでは、<美>という言葉（概念）は生まれていません。

<うつくしい>となにかを見て、誰かが口にして、それを別の人が同じ音声（声にした音）で応えて、それをまた誰かが応じて、<うつくしい>と呼び合っていく、その繰り返しの過程から、<うつくしい>と呼んでいるその<なにか（対象）>のなかに、<美>と名づける働きがあるのに気づくときがやってきます。その瞬間です、<美>という言葉（概念）が生まれるのは。

（この<美>と<美しい>の距離・隔たりは、人間が生きているということのなかで、つねにその人の意識と行動を動かせる原動力になっているようです。）

ところで、<美>という言葉は文字の誕生を待たねばなりません。

が、<うつくしいもの><うつくしいということ>という言い回しは、文字誕生以前から、人びとの心（頭）のうちに言葉として生きていました。そして、みんなで<うつくしい>と呼んでいたいくつものモノ（対象）に、たとえば夕焼け雲とか、咲き誇った花とか、坂道を駆け上る鹿とか、磨き上げられた装飾品とかを同じ<うつくしい>という言葉で呼んでいて、そういうモノを<うつくしいもの>と呼ばせる力が、それぞれのモノのうちに働いていることに気づくときが訪れます。そして、その力を言葉にしようします。そのとき、<美>という概念が生まれました。

<美>と名づけたいなにか（力）がそこに働いている（生きている）と知った瞬間、<美>という言葉（概念）が生まれるのです。この瞬間は、世界を動かしているなにかを「神」と名づけた意識の働きと共通しています。その瞬間、人びとは、言葉にし切れない感動に搏たれ、身震いしたにちがいない。創世記の冒頭六日間の天と地の創造物語はそんな感動が語らせた世界誕

生の物語です。＜美＞の発見、＜美＞との出会いの経験は、「神」との出会いのもう一つの謂と
言っている。

創世記の六日間は、「神」がみずからの仕事（作品）をくうつくしい＞と納得感動した六日（1
章～2章）間です。そして、この「神」の創造物たる＜美＞を讃え守るために誓約を立てようと
する（＜美＞を護るために＜利＞に誓う）のが「モーセの十戒（「出エジプト記」）です。

エデンの園の生活はまさに＜美＞そのものでした。アダムとエヴァがエデンの園を追い立てら
れ、再び戻れなくなったとき、人間（アダムとエヴァ）は、二度と＜美＞を見ることは出来なく
なった、と創世記は告げます。創世記を読んでいると、人間は、もはや＜美＞を取り戻すことは
出来ないかのようです。人間は＜利＞という手段を使って＜美＞へ向かうしか方法を持たないと
旧約聖書は言おうとしているようです。（＜利＞の魅力と威力を人間に教えたのは蛇です。「賢
い」ということは＜利＞に聡いということでもあります。）

＜美＞から＜利＞への大きなうねりが、創世記から読み取れます。

世界創造から（それを神は＜美しい＞と見た）から、その＜美＞を守ろうとする＜法＞の宣言へ。
このあいだに何年の歳月が横たわっているのか。それは正確に数値にすることは出来ません。と
ほうもない時間が流れたことでしょう。この時のうねり。しかし、意識にとって、この千里の徑
庭は一瞬でもあります。わたしたちは、創世記を読みながら、一瞬にして世界と人間の誕生の瞬
間のときへ、遡ることが出来るのです。

古事記には、こういう意識の体験の言語化へのうねりが、大胆に語られていません。

東アジアで＜美＞を強く語り文字にしたのは『老子』です（第2章で「美」を論じています）。

「神」についても老子は語っています。東アジアの言語風土のなかで、それを老子は「道（タオ）」
と呼んでいます。その徹底した相対的世界観がヨーロッパ大陸のように世界の創造者を絶対者
として人格化しなかった。「神（ヤハウエ）」から絶対者としての人格的役割を取り除けば「道（タ
オ）」です。しかし、他の諸子百家も孔子も、ヤハウエのような絶対者を思いつきませんでした。
孔子は「五美（恵、労、欲、泰、威）」を掲げていますが、一見して明らかなように＜利＞に立
脚した価値観で繋いでいます。ほかに「君子は美を成す」という言葉もありますが、この言葉は
「君子は人の美を成す、悪を成さず、小人是に反す」と続いていて、政事の出来栄へのことに美
の概念を圧縮させ、結局＜利＞の論理を倫理にしてみせるのが孔子です。

東アジアでは、つねに具体的な出来事の語りによって、言葉にならない＜美＞の体験を別の言葉
で語り継いできました。孔子はそれをすべて「忠、孝、義」等々の＜利＞の言葉に置き換えて、
儒教を確立したのです。

日本列島では、大陸の思想が輸入されるまで、経験の概念化に強い関心を持ってきませんでした。
それはそれで、一つの意味深い文化の営みの歴史を積み重ねて来ました。＜美＞という言葉は身
に着けませんでした。が、「風雅」—これは平安時代から使われていて＜美＞の代わりの役目を果
たしていました。もともとこの「風雅」は大陸の『詩経』に書かれていた詩の様式を指示する二
字熟語です。その大陸での意味を換骨奪胎させて＜美＞の喩として列島の人びと（知識人）は「風
雅」を採用したのです。芭蕉の「軽み」も利休の「侘び」も本居宣長の「ものあはれ」も、これ

らは<美>という概念の代わりとして、それぞれの時代で考えられていたと言っていいでしょう。日本列島にあっては、つねに具体的な出来事の現れに預けて、言葉にならない<美>の体験は、蓄積醸成されていたのです。

<美>は、旧約では、神に禁じられた体験。東アジアでは、別の言葉でしか伝え合えない体験であったというわけです。

II

ボクは人間の欲望のうちで最も貴い欲望、そうであることによって最も脆い欲望は<美>だと考えております。その貴く脆いありようが<利>によって翻弄されているのに、翻弄されていると気づいていないのが現代ではないか。気づいていないし、気付かないことを「良し」としている。

では、それはどういう形で、どういう方法で、欲望として満たして来たのか。

その初源のありかた（満たされかた、満たそうとする仕方）は、どんなふうだったか。

なぜ貴く、なぜ脆いのか。

それは、現代のわれわれになにを問いかけてくるか、そんなことを考えようとして、古事記の冒頭を読み、創世記と比べてみようとして来ました。

これまでの人間の知の歴史、その営み、とくにヨーロッパの知の歴史（日本の現状はその圏内にいます）のなかでは、人間の根源的な欲望は<利>への希求だというふう考えられて来ました。食欲、性欲は生存への根源的欲望であり、<利>の代表概念とされて来て、シュルレアリスムや精神分析が説得力を持って来ました。<利>に対峙すべき価値概念としては、<美>ではなく、もう一つの<利>（技術／術）が提起され、され続け、こうして磨き上げられた<利>が<美>としてさえ受け止められるようになって行きました。「芸術」という言葉の起源がラテン語の「アート」、ギリシャ語の「テクネー」にあることは、そのことをよく伝えてあります。「アート」「テクネー」はもともと「術」「技術」を意味します。つまり<利を>求める術です。

この<術>の側面が、宗教の論理の補強に利用され、<美>を<善>の意味と同一視して行く道が作られます。

そして、<美>それ自体の意義についての思索は芸術論のなかに囲い込まれ、近代知識人はそれを学の自律と思い込んで来ました、とくにヘーゲル以降。「芸術美」の対立概念として「自然美」を置き、自然美は人間の精神活動が産んだ美ではなく、気晴らしの対象とはなっても、知の活動の対象とはならないという考えが出来上がってしまいました。つまり<美>は芸術の中でこそその真価を発揮しているという考えです。これが定理のように設定されているのが近代の美学です。そこを根拠に美術史という学が誕生しました。

こうして<美>そのものを問い、<美>が大切な人間の活動と考えることは忘れられて行ったと言っていいでしょう。

しかし、性欲にしても、食欲にしても、その欲望を満したいと思うとき、ただ満たすのではなく、

必ず出来るだけ＜美しく＞満たしたいという思い、願いに近い思いが働いているはずです。どんな行動を選ぶにしても、より美しく、より美しいモノと、美しいカタチで出会いたい、掌に入れたいというのは、すべての人間の行動を促す根源に働く欲望だと言えます。宗教はいわばそこにつけこんだのです。つけこんだという言いかたは少し無作法ですが、＜美＞を宗教信仰の軸に持ってこようとすると—宗教というのは多かれ少なかれ＜美＞の欲望に頼り、それを利用して信者を増やし、信仰体系の共同化と制度化を企てます—信仰共同体を支える柱として＜美＞は不都合なところがあるからです。宗教はすべからくどんな宗教でも、信者が信仰する対象として不変の強力な最強の力を持った超越的存在が必要です。その意味では、どんな宗教でも、超越的な不変の存在を信じ合い、法で行動を規制し合う共同体を作らなければ成立し得ません。

ところが＜美＞には、法がない。法を作る能力がありません（＜美＞に永続性を持たせるべく方法を考えたとき「芸術」が生まれたのです）。＜美＞はその点で、まったく無力です。信者の集まりを共同体として永続させるには、不変の力を持った、それぞれの人の欲望を満たすモノが必要なのです。

根源的なところで＜美＞を求めると、どうしてもそれを永続させたいという欲望がそこに付きまどってきます。ここで＜利＞が頭角を現します。＜美＞を永続させるための＜術＞という＜利＞が必要とするのは、＜法＞です。＜法＞というのは、人と人をつなぐ観念を＜言葉＞に（記号化）したものです。無文字文化時代から＜法＞はありました。文字化されずに共有されていただけです。それは、＜自己 vs 他者＞からなる＜自己＞（これについては別の機会にじっくり議論します）という個の観念のなかに棲む＜他者＞への恐れや愛、それらとどう応答するかといった好奇心や欲望に指針を与え、個のなかの＜自己＞を確かなものにします（そう信じさせます）。

おそらく、始めの始めのうちは漠然としていた＜他者＞との関係の意識感情が、応答を重ねるにつれて、確かな観念という形を取り、確かな声という言葉に成り、多くの人に定着して行きます。最初は個のうちに＜他者＞との共同性を持たないで蠢いていた＜ことば＞のようなものが、声にすることを繰り返すことによって、個のなかで定着し特有の形を持ち、その形を声に乗せて、＜他者＞に伝えることを繰り返して行くうちに、その＜他者＞（単数から複数へ）と、その言葉の形が共有されて行くのです。

＜美＞は、そういうふうには共有し合って行く形を、それ自身（＜美＞自身）では持っていないのです。最も根源的な欲望だから持てない、最も根源的なモノは喩を借りてしか伝え合えないのです。＜美＞にかぎりません。人間が考えるすべての現象の最も極限のありかたは、言葉や概念として共有出来ても、その具体的な形象を描き出すことは出来ません。そこで喩が大きな働きをします。

縄文草創期の土偶はまだわずかに二例しか発掘されていませんが、これからおいおい発掘されて行くでしょう。三重県粥見井尻遺跡からは一体しか見つかっていませんが、この土偶、土塊をぎゅっと握って掌を開いたら、そこに人の形があった！という発見、驚きをその形は伝えていて、土偶の始まり（誕生）を実感出来る好い例です。現在まだ一体ですが、おそらく、その最初の—

体が作られて、いくつも作られていったことでしょう。ちょうどなにかを見つけたとき、思わず<うつくしい>と声をあげたように、この土偶が最初に作られたとき、<うつくしい>に相当する叫び声を縄文草創期人は挙げたにちがいありません。そのときは<美>という概念はまだ生まれていません。しかし、この初源的感動があって<美>という概念は生まれ共有されて行くのです。<美>が概念として成熟して行けば行くほど、この初源の感動は忘れられて行きます。しかし、どんなに遠ざかって行っても、その抽象概念としての<美>は、初源の感動を呼び戻す用意はしています。用意をしなくなったときは、それは言葉でなくなっています。創世記も古事記も、とてつもなく昔の古い言葉ですが、その用意をしているからこそ、いま、読む面白さがあるのです。

創世記では、最初の人間「アダム」は大地の塵から作られます。古事記の淤能碁呂島は泥から作られます。縄文草創期の土偶は言うまでもなく<土>を握って作られました。創世記の最初の人間は土に「仕える」ことを任務として与えられます(2章11節)。土、大地と人間の深い関係をどちらの書物でも強く考えていたことを知るの興味深いことです。

(文字文化の時代になってからも、<美>という言葉が人類の語彙のなかに定着する遅さに気づくべきでしょう。<美>という言葉は、創世記でもはっきりと出て来ません。日本列島では、明治以降、西欧ではギリシア、つまり紀元前数百年ごろから使われ出しているようです。それにしても、西欧では紀元前数百年、日本列島では1890年以降と、<美>という言葉に関しては物凄い隔たりがあります。この隔たりは、東西の文明力を観察する上で象徴的です。物事を対照化して抽象概念にする能力は二項対立思考の冴えに由来します。)

<美>はつねに喩の方法を借りてしか伝え合えない—これは、人類共通です。初源的根源的な現象は東西も違いはなかった、と言えそうです。<美しい>という形容詞は、<美>そのものから離れている直喩です。<美しい>は、<美しい>と呼んでいるモノに付着して行きますが、その<美しい>といわれたモノの外側をぐるぐるまわるばかりです。<美>は、そんな<美しい>と呼ばれたモノいろいろのうちに潜む、それを<美しい>と人に呼ばせた力を引き出しました。しかし、その引き出されたモノを持続させ永続化させるために、ほかの手立てが必要なのでした。その手立て(術)を用意したのが<利>でした。

<利>は、すぐにそれに相応するモノ(対象物)を提示することが出来、数量化さえ出来るのでした。

<美>は<愛>に似て、裏切られたり、するりと逃げて行ったり、つねに身体的な応答を求めます。<利>は簡単に観念として形づくられ、身体から離れて、しかも身体を保証します。少なくとも、保証する振りが出来ます。

こんな<美>と<利>の葛藤が、創世記と古事記に読み取ることが出来るのです。

III

創世記冒頭、第一日目はまず光を創り、最後に人間を造るまでの6日間、神はなにかを造ると「それを見て良しと言った」（日本語新共同訳）とあります。

この「良し」、フランス語版では **bon**、英語版では **good**、ルター訳のドイツ語は **gut** と、みな日本語にすれば「良し」「善し」に当たります。ヘブライ語でも **towb**（トーブ。英語の **good** に当たる）です。ところが、ヘブライ語版のギリシア語訳として最古と言われている『七十人訳聖書』には、この「トーブ」は「**kallos**(カロス)」と訳されているそうです。「カロス」即ち「美」。調和のとれた美しさのことをさすギリシア語です。昔は、一つの言葉が現代よりも幅広い意味を持って使われていたので、限定してしまわないことが大切ですが、＜美＞という言葉の創世記のなかにおける役割の奥深さのようなものを感じ取りたいと思います。

古事記では伊邪那岐と伊邪那美が一体になろうとしたとき、「吾が身の成り余れる処をもちて汝が身の成り合わざる処に刺し塞ぎ以って国土を生み成さん」と言われて、伊邪那美は「然り（そうね）、善し」と答えます。この「善し」は二人して生み成そうとする国土が＜美しい＞ものであって欲しいという願いを込めた「善し」です。

＜美＞と＜善＞は、かつては重なり合っていました。

老子もこんなふうに使っています、「天下皆知美之爲美斯惡已（天下みな美の美をなすを知れば悪はやむ）。皆知善之爲善斯不善已（みなが善の善をなすを知れば不善はやむ）」。「美」がどのようにして＜美＞であるかを知ることが出来れば、「悪」はしなくなるものだ、「善」がどのようにして＜善＞でありうるかを知ることが出来れば「不善＝善でないこと」はしなくなる。

（この「悪」を醜いと読んでいる解釈がありますが、ボクも最初はそう読んでいいかなと思っていましたが、それは＜美＞の反意語を＜醜＞と考える二項対立思考法にわたしたちが馴らされ過ぎてしまっているからで、老子の時代にこの二項対立思考を適用するのは拙速と言えましょう。老子は＜美＞の対義語を＜悪＞と考えているのです。）

この老子の考えはすでに「淮南子」など8世紀の日本列島では読まれていたようですから、古事記の朗読者や記者には、馴染み深かったのかもしれませんが。

こんにち、＜美＞は一般に重い価値を持っていると見なされなくなっていますが、それは＜美＞と＜善＞がかつてのように重なり合っていられなくなり、引き離されてしまっているからです。＜美＞と＜善＞を引き離すのは、＜美＞の働きにも＜善＞の働きにも＜反＞として関わっている＜利＞の思想です。

以上、＜美＞と＜善＞がかつては重なり合っていたことを創世記や古事記、老子などから覗いてみました。しかし、＜美＞と＜善＞の重なりと離反のドラマは、西と東では同じではありません。創世記を思想信仰の根拠とする人びとのあいだでは、天と地を司る神を礼拝し、いかにしてその神の声に従って生きるかに人間であることの意義を求めて来ました。神と対峙し、共にあることに＜美＞の成就を求めたのでした。

それとは異なり、日本列島に棲む人びとは、天地がひとつになることを体感する境地に＜美＞を

求めたのです。神々は列島人にとっては隣人だった、という言いかたが可能かもしれません。しかしこのふたつの思想を比べてみますと、「天地」観はまったく異なる東西ですが、〈美〉を根源的な欲望として求めている点では共通します。〈美〉は人類共通の根源的な欲望なのです。どちらが優れているかという議論は、〈利〉の見地から脱け出していない議論です。

IV

たとえば「犬」という言葉（の音声、あるいは文字）に触れて（耳にして—この場合どういう状況で聞いたか耳にしたかによって反応しかたは変わるのでしょうが）、そのときまず自分の飼っている犬（あるいは日頃慣れ親しんでいる現実の犬—実在か不在かは別にして）を思い浮かべる人はいないでしょう。

「犬」という言葉（音声）、文字はすでに傍には不在である現実を喚び起す装置であります。「犬」という言葉は、自分が飼っている^{シェパード}犬も昔飼っていた^{秋田犬}犬も指し示しているはずなのに、「犬」という文字・音声からは、むしろ自分のそういう個人的な親しさとは別の「犬」の像を思い浮かべているはずで（「像」と書きましたが、厳密に言うと画像ではない、すぐに画像になりうる意識の手触り（掌の手触りではない）のような、固有名を剥ぎ取った存在感を「像」と呼んでおきます。）

そういう像を思い浮かべないと、^{ひと}他者と交流出来ないのが現実です。

いつごろからそんなふうな言葉の使いかたを^{ひと}人間はするようになったのか。

〈美〉という^{ことば}名詞と〈美しい〉という^{ことば}形容詞のあいだに横たわる千里の径庭は、いつもその隔たりを感じさせないで、わたしたちは日常を生活しているのは、さきの「犬」という語の経験過程の謎と深く繋がりが合っているようです。

〈美〉はつねに欲望の対象であるのに「犬」は欲望の対象として像を結ばない—例外はあるだろうけれど—という異いはあるけれど、〈美〉は無意識の裡に欲望の対象として働いているために〈利〉に干渉される、そうして、「犬」という言葉よりも人間の生存問題に深く関わってくる、という言いかたは出来そうです。

抽象概念を日常的に使いこなす（「犬」という言葉ですぐ犬一般を思い浮かべ自分の愛犬を想わない）ことによって、人間が獲得した能力にあらためて自覚的でありたいと思います。

一つの作品（絵画でも文学でも音楽でも）に接するとき、わたしたちは一瞬のうちにこの千里の径庭を超えています。超えていることを知ってひとつの作品に接するのとそうでないことにこそ、千里の径庭がある。作品の前でいつもそのことを弁えていたいと思います。